

詩と

ことば

* 4月

阿部 公彦

詩はことばでできているのに、そうは見えないことがある。純粹になろう、原点に戻ろうとすると、かえって珍しい変なものがでてくる。芸術はみんなそうだ。どんな作品にも「型」はつきものだが、芸術家はいつも「型以前」にも懂れている。

たとえば舞踏。バレエのような型からは自由で、物語や歌にも頼らない。身体のかねらせ方は一見無秩序で、あの世を見るような視線は病的にさえ見える。でも、何かが溢れている。形に至る一歩手前の何かがある。土方巽、笠井勲といった系譜につらなる櫻井郁也のダンス・ソロ「サイレントシゲナルズ」(十月28、29日)。地の底から「形以前」の何かを引っ張り上げようとする不思議な力がみなぎる。このギンギシと軋むような磁力が表現なのか、と思わせる。同じような寡黙さは写真にも見られる。

鬼海弘雄『誰をもう少し好きになる日』(文芸春秋)。ポトトレートの目に吸い寄せられる。どうしたらこんなふうに見られるのだろ

う。今にも語り出しそうで、何も言わない目。ことば寸前の何かであふれんばかり。

金堀則夫は『畦放』(2013年)以来、気になっていた詩人だ。「おもいな／いつから／からだのなか／石がたまってきたのか」と始まる巻頭詩に魅了された。今回、『金堀則夫詩集』(土曜美術社出版販売)にまとめられた作品群を見渡すと、「私」という主語が抑制され、石、水、土、空など物質が主役となっている。無機的なものではない。すべてが大地のリズムに連絡し、地底的な生命の鼓動を響かせる。原始の匂い、私の根源を指している。

形以前の何か

広田修の『zero』(思潮社)も物質に取り憑かれている。「私には自分が岩であった頃の記憶がない」(「坂」)。でも、こちらは軽妙で、洒落で、くらくらするようなひねりが効く。「夏の太陽には少年の血が混じっている／腿に太陽を埋めるとひんやりして／太陽が冷たい直線できていることが分かる」(「夏」)。才気の人だ。才能をもてあまして思わず詩を書いたかのように、頁面がまばゆい。と同時に、ぐっと堪えて思いきり自分の中の「詩」を抑圧し散文を書いたら、さらにすごい作品が書けそうな気もした。(東大准教授)

◆第120回文学界新人賞 加藤秀行さん(32)の「サバイブ」と杉本裕孝さん(36)の「ヴェジトピア」に決定。受賞作は、5月7日発売の「文学界」6月号に掲載される。

◆第58回群像新人文学賞 乗代(のりしろ) 雄介さん(28)の「十七八(じゅうしちはち)より」に決定。受賞作は、5月7日発売の「群像」6月号に掲載。

った 何だ 自分 詩で 恥ず けず 原稿 のが で、 詩は ば、 は、 一回 や、 彼を げ、 彼の 苦の 言が 分の 遊 酔う 争の め、 なつ して さを た。 を仰 める いて つぶ もあ の敗 春夫 無邪 どう か。 葉は 思わ 子大 (学)